



日本人が知るべき親日の歴史（第4回）

トルコ

株式会社せおん 代表取締役
株式会社テイク・グッド・ケア 代表取締役

越 純一郎

深まる米中対立のなかで、トルコのエルドアン大統領は中国に接近しているが、こうした時にこそ日本とトルコの親日の歴史を思い返さねばならない。

親日史は、相手国との現代的課題と結び付けて考えねばならない。歴史を知らねば近視眼となる。

テヘラン邦人救出劇 —1985年3月の奇跡

「3月19日午後8時以降、イラン上空を航行する全ての航空機は、民間機でもイラク空軍の攻撃対象とする」。イラクが一方的に設定したこのタイムリミットまで48時間。それを過ぎれば、日本人約300人はイランから脱出できなくなる。

イランに日本の定期便はない。各国の航空会社は自国民優先で、日本人が入手した航空券は紙切れと化す。自衛隊機は法的制約で来られない。日本政府も救援機の派遣に踏み切れない。その時、ホテルに身を寄せ絶望の淵にいたテヘランの邦人に信じられない情報が飛び込んできた。

「トルコ航空が助けにきてくれる」

タイムリミットが迫り、空襲警報が鳴り止まないテヘランのメヘラバード空港に、何と2機のトルコ航空機が飛来し、日本人全員を乗せて、午後6時、トルコに向け離陸した。

やがてトルコ領に入り、恐怖と重い緊張で静まり返っていた機内に、オルファン・スヨルジュ機長の「トルコにようこそ！」というアナウンスが鳴り響くと、機内に歓喜の叫びが沸き起こった。「これで、助かった。凍りついていた血が身体中を駆け巡った。涙が止めどなく流れた。皆、泣いていた。」と機内にいた沼田準一氏は述懐している。（資料C）

95年後の恩返し

イスタンブールに着いた沼田氏たちに市民はみな笑顔を向けてすれ違い、沼田氏は「私達はこの国の人達に助けられたのだ。私達の無事を喜んでくれていた」と思ったという。

何故テヘランにトルコ航空機は日本人救出のためにきたのか。イランにいたトルコ人は陸路で祖国に帰ったが、それについてトルコ国内では何の非難も

出なかった。その理由は、100年前の事件にある。

エルトゥールル号事件 —1890年の海難

1887年、欧州列強の介入とロシアの圧迫に直面するトルコを、後に陸軍元帥となる小松宮同妃両殿下が訪問し、答礼としてオスマン・トルコ皇帝アブデュル・ハミト2世は、1890年、オスマン・パシヤ海軍少将を全権特使とする600人の使節団を、軍艦エルトゥールル号で日本に派遣した。明治天皇謁見などの職務ののち帰路についた同号は、9月16日、折からの台風で和歌山県串本町沖で難破し、死者587名、生存者わずか69名という惨事となった。

この海難に、50戸、400人の地元村民が総出で救援、生存者の搜索、遺品回収に当たった。「村民たちは裸になって体温を乗組員に伝えた」「小さな寒村の食料はすぐ底をつくが、村人たちは非常用の鶏を料理して介抱した」などの話が今に伝わる。

この報に明治天皇は直ちに医師、看護婦を派遣された。政府は地元の医者に対し、薬代等の経費を請求せよと通知したが、医師たちは「もとより請求する意思はなく、その資金は遭難者への義捐金にして欲しい」と返答した。

生存者は戦艦比叡と金剛でトルコに送り届けられた。（2015年に訪日したトルコ軍艦「ゲディズ」には、「比叡」「金剛」という名を冠した船室が設けられた）

トルコは歴史教育で親日観を伝える

この事件はトルコの歴史教科書で教えられており、子供でも知っている。日本人は献身的にトルコ人を救ってくれたとの思いは、100年経ってもトルコ人の心にある。これが、テヘラン邦人救出劇となった。

東日本大震災に際しても、トルコはまっさきに、大きな、心のこもった、支援を提供してくれた。

歴史を作った個人の功績にも注目すべき

エルトゥールル号遭難の報に接した多感な青年の山田寅次郎（24才）は募金運動を起こし、2年間で集めた義捐金を携えてトルコを訪れたが、謁見したアブデュル・ハミト2世の要請でトルコに留まり、

国交樹立前の両国交流に貢献した。彼は士官学校で日本語を教え、日本を語ったが、ケマル（後述）も生徒の一人だったのではないかという推測を述べる文献も幾つかある。

テヘラン邦人救出劇では、伊藤忠イスタンブール支店長の森永堯氏が、トルコのオザル大統領に対して直接にトルコ航空機の派遣を要請し、その決断を得た。個人が歴史を作ることもあるのだ。

同氏は、早朝にオザル大統領の私邸でパジャマ姿の大統領と打合わせをするので、大統領夫人が「パジャマ友だち」と呼ぶほどの関係だった。（資料A）

日露戦争は親日性の大きな源

トルコの親日性の源流には日露戦争がある。日露戦争は人類史上初めて有色人種が白人国家を打ち破ったもので、植民地支配下のアジア諸国民を歓喜させ、ロシアの支配・圧迫下にあったポーランド、フィンランドなどに衝撃を与えた。ネルー、ガンジー、孫文、毛沢東なども熱く、熱く歓喜した。トルコも同じで、日本の勝利を我がことのように喜んだ。

トルコでは、ロシアのバルチック艦隊を壊滅させた聯合艦隊司令長官東郷平八郎、欧州最大の陸軍国ロシアを旅順攻囲戦で破った乃木希典に因んで、男の子や店の屋号をトーゴー、ノギと名付ける例も多かった。TOGOという革製品の高級ブランドもある。

ケマル・アタチュルクと明治天皇

1923年に共和制へと移行したトルコの初代大統領ケマル・アタチュルクは、国父として現在も全国民から尊敬を集め、その教えは「ケマリズム」と言われ、今日でも国家の背骨となっている。

スルタン制廃止という体制改革と近代化を推進するケマルは、日本を範とし、明治天皇を改革者として尊敬し、執務室には明治天皇の写真を掲げていた。国父のこうした姿勢は、国民の親日性をいやがうえにも高め続けていると言えよう。（資料A、B）

朝鮮戦争のトルコ軍兵士も親日を広めた

朝鮮戦争には累計5万のトルコ軍兵士が国連軍として従軍し、その多くが日本で休暇を過ごし、或は傷病兵として療養した。彼らは一様に日本に好印象を抱き、母国でそれを語ったことが大きな影響を持ったと幾つかの文献が語っている。

日本人が親切で有能なだけでなく、戦後の荒廃の中でも、規律正しく、信義に篤く、清潔で、折り目正しいことに、強く印象付けられたという（資料A）。彼らの出身地はトルコ全土に及び、その影響も全土に及んだ。勤勉で、自己犠牲を厭わず他者、国家に尽くし、謙虚で高潔な日本人こそ、「真のイスラム教徒の姿を体現している」「日本のようになるべきだ」

という声は、トルコでは珍しくない。

日本の高度経済成長も親日性の重要な源

アジア諸国の首脳も多くは、「大東亜戦争における日本の勇戦のおかげで、自国は独立できた」と発言するが、同時に「日本の最大の貢献は、実は戦後の日本の高度経済成長だ」とも強調する。トルコ人も全く同じで、日本の経済発展は驚異のまばゆい奇跡であった。軍事力や外交以上に経済力が重要である。

日本人とは真の友人に⇄欧州とは複雑な思い

トルコは、NATOで第二の軍事力を有する一方、EU加盟を今も実現できずにいる。欧州諸国のトルコに対する偏見と違和感は、抜きがたく、根強いのだ。

だが、一方の先進国である日本となら、真の友人になれることの意味は、トルコ人にとって大きい。

日本人の無知による、トルコの片思い状態

だが、誠に残念ながら、日本人はトルコを良く知らず、認識が低い。これは日本の国益にかかわる。

元駐トルコ特命全権大使の山口洋一氏は、日本のメディアが、欧米の尻馬にのって不適切なトルコ報道をすることに強い不満を呈されている（資料B）。トルコの抱えるアルメニア人問題、クルド人問題、キプロス紛争について、日本のメディアも政府さえも、認識の浅さから、トルコの立場を良く知り耳を傾けることを怠っていると指摘されている。これは軽く考えてはならない問題である。

日本人が恩を忘れる民族であってはならない

テヘラン邦人救出劇の立役者の一人であった森永氏は、トルコへの恩返しを心に決め、第二ボスフォラス橋プロジェクトの受注に心血を注いで成功し、更にトルコ初の日本の製造業投資であるいすゞ自動車のトルコ進出も実現した。

トルコ航空機でテヘランから救出された沼田準一氏ほかは、トルコがそこまでしてくれたのはエルトゥールル号事件で串本町の住民がトルコ人救援のために献身してくれたお陰だと、ふるさと納税を串本町に対して続けておられる（資料C）。尊い行為だ。

翻って、テヘラン邦人救出の恩を、一般の日本人は然るべく認識しているだろうか。沼田氏はこの救出劇を巡る国会答弁の内容に憤っている。安倍晋太郎外相は日本外交の成果だと自画自賛したが、トルコに感謝する発言をしていない（資料C）。受けた恩を忘れるのでは、日本人の名が泣く。まず全国民が知ることだ。知る努力、知らせる努力が重要である。

参考資料

- A 森永堯「トルコ 世界一の親日国」明成社
- B 日本戦略研究フォーラム編「愛される国 日本」（第2章）
- C 「イラン・イラク戦争 奇跡の救出劇 日本・トルコ友情物語（沼田準一さん編、高星輝次さん編）」（ウェブ上の情報）
- D 「日本とトルコ130周年記念 特設サイト 日本とトルコの絆」（ウェブ上の情報）